

Women's Sports Foundation Japan

WSF Japan News

'99 March Vol.37



- Mail Box/前略 会員の皆様へ ミツ谷洋子…2
- Women's Sports/特集:座談会 アジアの女性スポーツ…3
- Opinion/おんな? おとこ? すぼ一つ? 佐野信子…7
- Column/パワーリフティングのすすめ 吉田寿子…8
- Enjoy Sport!/早朝の“体操会”で広がる友達の輪 照井英里子…8
- Hot Line/会員の広場…9
- Topics/各紙掲載記事より…10
- Information/事務局だより…11



Mail Box

前略 会員の皆様へ〈第9信〉

WSFジャパン代表

三ッ谷 洋子



私が仕事の上で尊敬しているMさんという男性から先日、手紙をいただきました。その中にこんな感想が書いてありました。「日経新聞で企業とスポーツを主題にした討論などを、2ページいっぱい報じているのを読みました。パネリストなど、5人全員が男性。今どきこのような人選でよいのか、などと思いました」。

Mさんが指摘されるように、最近のシンポジウム等の出席者には、ほとんど女性が入っています。時として、テーマと全く関係のない女優の起用などもあります。ゼロよりはマシだと思っています。

☆☆☆

スポーツ界では、I O C (国際オリンピック委員会) が、女性登用に関して具体的な基準を設けて、積極的な対応に乗り出しています。I O Cほか各国N O C (国内オリンピック委員会) や、競技団体の理事会など決定機関の女性役員の比率を、西暦2000年までに10%、2005年までに20%とすることとしています。

この基準を日本が守るとすれば、たとえばJ O C (日本オリンピック委員会) の役員は3月現在で理事20人、監事2人ですから、4月の改選では女性の理事をこれまでの1人から、2人にする必要があります。今期で退任する古橋広之進会長の後任人事だけでなく、女性理事の人選について注目することも忘れてはなりません。

9年前、私たちWSFジャパンは、体協(日本体育協会)とJ O Cに、「女性役員の登用」と「女性委員会の設置」に関する要望書を提出しました。残念ながら「女性委員会」はいまだに設置されていませんが、女性役員ゼロの状況は改善されました。体協の歴史に初の女性会長(高原須美子さん=93年~95年)の名が刻まれ、目下、理事と監事に1人ずつ女性が登用されています。

しかし、各競技団体の理事会では女性を見るのは

極めて稀です。女性の進出が難しい状況を米国では「ガラスの天井」があると表現します。日本では女性の前に締め切った「鉄の扉」があるのだと、女性問題に詳しい評論家・樋口恵子さんは説明しています。言い得て妙とは、正にこのことです。

☆☆☆

I O Cが女性の登用に関し積極的に取り組むようになった裏には、初の女性副会長であるアニタ・デフランツさんの存在があります。彼女はボート競技の元五輪米国代表で、モントリオール大会(76年)の銅メダリストです。80年のモスクワ大会でも代表に選ばれていましたが、カーター大統領(当時)の政治的な判断により、不参加を余儀なくされます。

大学卒業後に弁護士となっていたデフランツさんは、仲間の選手、コーチ、役員に声をかけて原告団を組織し、五輪ボイコットを決めた米国オリンピック委員会を連邦裁判所に提訴しました。こうした活動が認められ86年、黒人女性初のI O C委員となりました。アトランタ五輪で女子の正式種目としてソフトボールが採用されたのは、彼女の力によるものです。そして一昨年、4人の副会長のうちの1人に選ばれました。

☆☆☆

国際陸連(IAAF)では規約を改正して、新たに女性理事2人の枠を設けました。(3ページ~:座談会「アジアの女性スポーツ」参照)日本陸連では一度、女性理事が誕生しましたが、前回の改選でまたゼロに戻ってしまいました。国際大会を頂点とする競技スポーツから地域を支える生涯スポーツまで、日本のスポーツは「女性」抜きには語れない時代になっています。各スポーツ団体は規約(寄付行為)を改正し、女性に対して「鉄の扉」を開く努力をお願いしたい。また、スポーツにかかわる女性たちは「鉄の扉」をたたく勇気を持って欲しい。

これが現在の私の一番の願いです。

Women's sports

特集: 座談会
アジアの女性スポーツ

<出席者>

- 田中 良子さん
国際陸上競技連盟・アジア陸上競技協会・日本陸上競技連盟の女子委員会委員を務める。
- 大須賀 純さん
読売新聞運動部記者。昨年、中東4か国の女性スポーツ取材した。
- 井上 雅史さん (紙上参加)
青年海外協力隊員として94~96年、ブータンで卓球の男女ナショナルチームを指導した。

<司会> 三ッ谷 洋子 (WSFジャパン代表)

日本の女性スポーツの発展を考える時、常にお手本となり目標となるのが欧米諸国です。しかし、時には日本が属するアジアについて考えてみることも、大切ではないかと思い、座談会を企画しました。(当日、井上さんはインフルエンザのため残念ながら欠席され、後日の紙上参加となりました。)

— 初めに、みなさんがアジアとかかわりを持つことになったきっかけを、お話しいただけますか。

田中 1984年にアジア陸協が女子委員会を設置することになったんです。その時、日本陸連から、日本の女子担当ということで指名されました。

大須賀 読売新聞では去年、アジア大会があることもあって、運動面の長期連載としてアジアを取り上げることになりました。その一つのテーマが「女性」でした。

今、うちの新聞社では運動部の女性記者は私ひとりです。そこで「女性」については私が担当することになりました。



▲大須賀さん

田中 8月13日から1か月間、イラン、クウェート、カタール、UAEを回りました。

井上 私は青年海外協力隊の試験に合格した時に、希望地域について「どこでも」と答え、たまたまブータンの担当となりました。それが一生かかわり続けたいと思うような、運命的出会いとなるのですが、それまで「ブータン」という国の存在すら、知りませんでした。



▲座談会風景(右から田中さん、大須賀さん、三ッ谷)

— これまで日本人にとってアジアというと、その一部の中国、韓国などごく限られた情報しかありませんでした。

大須賀 むこうに行く前に、中東に関する資料を探したのですがなかなかなくて。断片的に伝わってきたのが「イスラム諸国女子競技会」が、イランですでに2回開かれているということでした。

国際陸連の「女性戦略」

田中 アジア陸連の女子委員会には、中東からシリアとヨルダンが委員として入っています。陸上競技をやっていない国も多いですね。サウジ、カタール、オマーン、UAEなどです。4年ほど前にオマーンの人に会った時、今は自国の女性はスポーツをしていないけれど、周りの国でこれだけ盛んになると将来的には変化が起きるだろう、と話していました。このことばに、私は非常に興味を持ちました。



▲田中さん

— 東西の社会の変化が「ベルリンの壁」を崩したように、女性スポーツの波が中東を変えていくということになるかも知れませんね。

田中 去年は国際陸連が定めた「女子陸上競技年」ということで、いろいろな活動がありました。特に「カタール・グランプリ」は画期的でした。

大須賀 これには国際陸連の絶妙な戦略があったんです。「グランプリ・シリーズ」といって、世界のトップクラスの男女アスリートが参加する賞金大会があるんですが、カタールがアラブ諸国として初めて開催することに決まったとき、国際陸連は「女性にも見てもらうようにしなければ認めない」といったのです。

— カタールでは、スポーツ大会の観客は男性だけなんですか。女性は見てはいけない。

大須賀 女子の種目が行われるのも初めてなら、女性が観客として見るのも初めてでした。

田中 大会の前日には、女性スポーツのシンポジウムも開かれました。70〜80人の女性が集まったと聞いています。



▲女性の馬術競技会（イラン女性スポーツのバブルより）

大須賀 モロッコのムータワキル、ロサンゼルス・オリンピックの陸上400メートル障害で優勝して、イスラム圏の女性として初のメダリストですが、彼女がそこで講演をしました。

田中 彼女は国際陸連の理事でもあります。国際陸連が規約を改正して、2人の女性理事を入れるようになりました。ムータワキルは引退後、モロッコ・スポーツ界のリーダーとして活躍しています。アフリカ諸国の強力な支援があったそうです。

大須賀 シンポジウムで彼女は「信仰は心の中にあるべきもので、見かけにこだわるべきではない」といったんですね。

〜女性専用スポーツセンター〜

— イスラム社会の女性政策への批判ともとれますね。ところでスポーツ施設は、男女でどのように分けているのですか。

大須賀 曜日や時間帯で分けています。女性だけの「ヘジャブ・スポーツセンター」というのもありました。女性がスポーツをするときは、指導者も全て女性です。これは、女性の社会進出の助けになっているという説もあります。

— 女性だけのスポーツセンターは、イラン以外にもあ

るんですか。

大須賀 クウェートには女子選手の強化施設があります。以前はレクリエーションセンターだったところを改装して使っていました。200人近くの女子選手がバスケット、卓球、テニスなどに分かれて練習をしています。クウェートは長いこと女性のオリンピック代表を出していないので、シドニー（オリンピック）では出そうと意気込んでいます。

— 大須賀さんが今回の取材をされて、予想外だったことは何ですか。

大須賀 とにかく驚いたのはイランです。あれほど女性のスポーツが盛んだとは、予想だにしていませんでした。各所に日本とは比べものにならないほど規模の大きなスポーツセンターがあります。外では黒いヘジャブの女性が、中に入るとTシャツに短パン、レオタードです。テヘランの国立ケシバリ・スポーツセンターというところは、200メートルの陸上トラックの横にバドミントン、バスケット、バレーのコートなどがズラッと並んでいるという、すごい施設です。

— イランで思い出したんですが、この前のサッカー・ワールドカップ・アジア予選で日本はイランを破って代表権を勝ち取ったのですが、イランはその後、豪州にまで出かけて行って、最後に劇的な勝利で本大会の進出を決めました。代表チームの激励会に2千人の女性ファンが押しかけて、やむなく入場を許可したそうですが、思わず拍手を送りました。

大須賀 あれがキッカケで、女子のサッカー・チームを作る動きが出てきました。イスラム革命前は女子サッカーも盛んだったんです。ボール会社社長のアボタリブさんという方がコーチ、審判の養成から取り組んでいます。去年の8月末に屋内での練習を始めました。将来は屋外でやりたいとっていました。ヘジャブをつけていないので、現在は外ではできないんです。

— ブータンの宗教はラマ教（チベット仏教）だそうですが、イスラム教のような男女の隔離政策はないのでしょうか。

井上 首都ティンブーに卓球場があるんです。クラブのような形で男女のプレーヤーが集まっています。私はそこで男子選手と同様に、女子の選手もごく自然に指導するようになりました。日本でいえば、小学校から

大学までの部活の顧問をしているような感じです。

オリンピック委員会所属のナショナルコーチでしたがジュニアクラスの指導から大会の実施まで全てをこなす“1人卓球連盟”のような状態でした。

〜必要なのは共に学ぶ姿勢〜

— 3年前に「アジア女性スポーツシンポジウム」でマニラにいった時、初めて貧民街というものを見ました。アジアの多くの国では、庶民は生活するのが精一杯で、一般の女性がスポーツをする環境は、まだまだ整っていないように思いますが。

井上 ブータンの場合、余暇の過ごし方としてスポーツとかかわりを持っている人は、まだまだ一部のようです。女性が参加できるスポーツ自体が少ない分、余計に感じるのかも知れません。子供にしてもある程度、生活に余裕が無いと、家の手伝いや弟妹の世話が優先されるので、そういった意味ではスポーツができるのは、学校へきちんと行っている子供に限られます。

競技スポーツではスポーツに対する価値観の違いだとは思いますが、プレーヤーのステータスが低いですね。その裏には「どうせ、うちの国は弱いから」といった意識もあるようです。用具や施設等の整備が不十分なことはいまでもありません。

農業以外の産業がほとんどない国ですから、手に入れるのは難しい状況です。シューズ一つにしても、ある程度の品質のものは、簡単に買える値段ではありません。

大須賀 イランでも1979年のイスラム革命前は、王族関係など特別な人しかスポーツをすることができませんでした。しかし、2年前にハタミ政権になって、一段と女性スポーツが盛んになってきました。生活レベルが上がったというよりは「女性もスポーツをしよう」という政策によるもので、安くできるようになったことが大きな理由だと思います。以前は女性たちも「スポーツなんか」といつていたそうですが、今は変わりました。

井上 任期中にインド、ネパール、バングラデシュの卓球連盟を訪ねて回ったんですが、大国インド以外は、女子の選手層の薄さを感じました。特にバングラデシュは宗教上の問題もあって、女性のスポーツ参加が難しいということでした。

— 井上さんは、日本とは宗教も習慣も異なる国で実際

に生活し指導をされたわけですが、全体的な感想としてはいかがですか。

井上 協力隊の経験を通して感じたのは、「自分が変えよう」とか「そのやり方はこうしなくてはだめだ」といった、肩に力が入ったサポートになっていないだろうかと自省する意識を常に持たなければ、ということでした。その国が現在に至るまでには、いろいろな積み重ねがあるわけでその上で物事を変えていかなくてはならないのではないかと思います。

そうでないと、その改革の実行者がいなくなったら元の木阿弥といった可能性が高いと思います。長いスパンで考えた時に、たとえゆっくりでも一歩ずつ進んでいるという形が望ましい。

しかし、そういう私もかなり力が入っていて、ブータンではむこうの方と衝突したことも度々です。今ふり返ると、かなり生意気だったなあと思います。体育の授業を受けていない子供にとっては、まっすぐ並ぶことだって大変なんだということを知りました。援助とか支援というレベルではなく、共に学んでいこうという視点が重要なのではないかと思います。



▼帰国前にブータンの若い選手たちと（首都ティンブーの卓球場）

▲井上さんは（左端）広島アジア大会にブータン・チームを率いて出場



— アジア全体を見回した時に、逆に日本が遅れていると思われることも、あるのではないのでしょうか。

田中 アジアの特殊性を考えると、もっと組織的な活動が必要だと思います。アジア陸協加盟の45か国のうち日本を含めて7か国に、女子委員会ができています。その中で香港やマレーシアなどでは、組織的な動きを始めています。例えば香港は女子選手に対するセクハラの問題に対し規約を作りました。日本の女子委員会の活動はまだここまではいっていません。

また、女子委員会ができていない国からは、日本がど

のようにして女子委員会を作ったのか教えてほしいといわれます。積極的な情報交換を望んでいるんです。これからは、お互いに学び合いながら交流を深め、ネットワーク作りをしていきたいと考えています。

大須賀 私も今回の取材を通して、特に交流の大切さを感じました。向こうに出かける前に、なかなか取材用のビザが出なかったのが、良くない印象を持っていました。ところがいってみると驚くほど取材はスムーズでした。こうした誤解や偏見を無くすためにも、交流は必要です。スポーツはその手段としても一番いいのではないかと思います。

イランはレスリングが強いんですが、レスリング協会の事務局長さんにお話をうかがった時「日本は同じアジアの国なのに、なぜ選手を送ってくれないのか」と聞かれました。日本のレスリング協会にそれを伝えたところ「そういうことはしたことがない」の一言でした。日本にとっては中東は同じアジアの国という意識がほとんどないんですね。



▲取材の大須賀さん(右端)もヘジャブ着用(イラン)

井上 私も交流の大切さについては痛感しました。もっと個人のレベルで、日本のいろいろな方がアジアの人々と交流をもてるといいかな、と思います。競技スポーツの水準を高めるといった視点だけではなく、草の根的な活動をサポートするようなシステムがいろいろ立ち上がってくると、日本という国も楽しくなってくるのではないのでしょうか。

～新たなネットワーク作り～

— アジア全体を視野に入れた場合、田中さんは女性スポーツの振興について、どうお考えになりますか。

田中 ヨーロッパとアジアでは、スポーツの概念が違うんです。アジアの場合は「命を大切にする」というこ

とがその基本になります。女性は特に「命を育む性である」ということを忘れてはいけません。たとえば、マニラのスタジアムの横に住む貧しい家の女性にとっては、スポーツより健康が大切なのです。アジアなりの理論を構築することが大切だと思います。

— アジア陸協の女子委員会としては、どう対応しているか。

田中 「アジアの国はどこもお金が無いので援助をする」というのではいけない。彼女たちが自ら創出していくことが大切です。そのためには、先程のネットワーク作りがまず必要です。

現在、加盟45か国にアンケートを送って、情報を集めています。12～13か国くらいしか回答が戻ってきませんが、記入者が女性か男性かということも含めて、細かい情報の収集を心がけています。その結果を国際陸連に報告し、またアジア陸連の機関紙に女子委員会として1ページをもらうようにしています。

— 連絡が取れていない国でも、もしかすると女性の指導者が孤軍奮闘しているかもしれませんね。そんな人にとっては、励みになる情報にもなるでしょう。

井上さんのブータンとの関係は、その後どうなっていますか。

井上 私にとってブータン王国での2年間は人生の宝物のようなものです。そのお礼といっておこがましいのですが、どんな形でもいいからブータンのスポーツ界とかかわり続けることが、人生の夢であり目標となりました。私の帰国後、ブータン側は高校に協力隊の体育教師を入れるなど、新たな動きを見せています。私の後に指導した体育系隊員の思いを集めて、何かができないだろうかと考えています。協力隊の技術顧問の青山先生(NHKの体操講師)にもご指導いただいて、模索しているところです。

— ご活躍を楽しみにしています。お忙しいところ、皆様ありがとうございました。

<最後にひとこと>

他の大陸に比べて多様な民族、宗教が混在しているアジア。大不況の真只中とはいえ、日本が経済大国であることに変わりはありません。アジアで私たちができる事は、いろいろありそうです。(三ッ谷洋子)

★★★ Opinion ★★★★★★ おんな? おとこ? すぼ一つ?

スポーツ文化を問い直す「女性スポーツ」研究

★★★★★★★★★★★★★ 佐野信子 ★★★★★

町中でふと見かけた若者の性別がわからない。こんな経験をしたことはありませんか。女性のショートカットやズボンなどはや当たり前、男性のロングヘアやピアスもすっかり定着し、最近では、化粧やエステも女性占有のものではなくつつあります。

また、交差点で目の前を横切ったダンプカーの運転手が女性であったり、保育園や幼稚園で乳幼児の世話をしている男性の姿を見かけるのも、さほど珍しいことではありません。職業の垣根もどんどん低くなっています。

これまで女性と男性を分けてきた境界線がいろいろところで揺らぎ始めています。「らしさ」に縛られずに、「私」としての「個性」を大事にする生き方が認められつつあるようです。とはいえ、話がひとたびスポーツに関するものとなると、事情が異なってしまうようです。

1. 大学生のレポートから＝「女性」とスポーツ＝

ある大学生は、自らの経験を振り返って次のように綴りました。(字数の関係で少し省略して引用します。)

『私は数学が得意だったので、周りの人が「理数はやっぱり男子よね」みたいなことを言うと、かなりムツとした。女でも理数が得意な人はいるんだと思って頑張った。体育にも積極的に参加したが、体力面では男の方が力があるとやっぱり心のどこかで思っている』別の学生は次のような考えを抱えています。

『私も女性の一人として男尊女卑とか、家事は女性、という意識の不合理性や、また、職場における男女の差別などは、今後、というより今すぐにも平等にすべきだと大いに思っている。しかし、本来、男と女に体力の差があるのは事実である。女性だからといって、職場で昇進させてくれないのは明らかな差別だが、マラソン大会で男子と女子の走る距離が違うのは、区別である』

男女平等に対する意識の高い学生でも、「体力」や「運動能力」そして「スポーツ」については、「女性」「男性」の境界線を未だ根強く意識しているようです。全ての女性が全ての男性に劣るわけでもないのに……。そこでは「個人差」や「個性」といった発想がすっぱりと抜け落ちてしまっています。

2. 「女性スポーツ」研究の動向

以前、女性とスポーツに関する文献をまとめる作業をしました。「女性」を対象とした体育・スポーツ研究の成果は多分野においてかなり蓄積されていましたが、その量的な蓄積を手放しで喜ぶことはできませんでした。というのも、体力や運動能力に関する女性と男性のデータを比較することに終始したものが少なからず認められたからです。

なにもデータをとること自体が問題というわけではないのです。ただ、データが一人歩きして、特に平均値にまとめられることで、体力や運動能力に生まれながらの男女差があるかのような、さらにスポーツでの男性優位は当然であるかのような錯覚を読み手にもたらすことが心配なのです。データの分布をよく見れば、男性よりも優れた成績を示す女性もたくさん存在するのに。

先日、スポーツでの女性の活躍ぶりを示す一つの指標として、長野オリンピックに携わった女性と男性の数値を比較しようと思いました。選手構成は難なく把握できたものの、役員の構成となるとその数値をすぐには入手できませんでした。精緻な研究成果が多数みられる一方で、女性スポーツの現状を認識する上で基礎的と思われるデータは不足しているようです。自らの怠慢の前に自戒の念も込めながら、男女平等やジェンダーの視点に立つ女性スポーツ研究の一層の推進が望まれます。

3. 「女性スポーツ」研究の射程

「より速く、より高く、より強く」というオリンピックの標語が如実に示すように、現在のスポーツで主流をしめる近代スポーツは男性の身体を基準に生成し、発展してきました。もちろんここで求められる身体に適合する女性もいるけれども、適合しない女性もいます。当然のことながら適合しない男性も存在するのは、「女性スポーツ」研究はその対象が「女性」であることにとどまりません。既存のスポーツにおいて女性を解放すると同時に「男らしさ」を基準として発展した現在のスポーツ文化そのものを問い直すという視点も内包しています。スポーツにおいて人が「性」を超越し、さらには、スポーツのあり方自体もいつの日にか「性」を超越してしまう。「女性スポーツ」研究が貢献するところは大きいだろう、と予感しています。

(さの・のぶこ) WSFジャパン会員、お茶の水女子大学助手。

Column

パワーリフティングの すすめ 吉田寿子

世の中、なんとなく暗い。株価は下がる、景気回復の確たる見通しはない、円安が進む、政治家や官僚への不信もある。パワーリフティング競技人口も減っている。これも世の中の閉塞感のせいなのか？

しかし、ものは考えようだ。好景気やブームに乗ってボディビルやパワーリフティングをかじってみようという人もいる。世の中、なんといっても健康ブームなのだから。しかしブームや流行は去るものだ。

流行が下火になった今こそ、世の中の低迷期だからこそ、みんなが自分にとって一番大切なものを、誰にも左右されずに選択できる時だ。そうしてウェイトトレーニングに興味を持つ人がいたら、これは本物だ。

「車にお金がかかってねえ」と高級外車を持つ友人がいる。

「あら、大変ねえ。外車は修理費が高いから持たない方がいいって言うことかしら？」

「修理費？ 違うね！」

「……」

「維持費だよ、い・じ・ひ。たとえば、人間でいえば医者にかかずに早死にするか、医者にかかって悪いところを治して長生きするかって事だよ。

この車が好きだから、手放したくないから、維持費にお金を惜しむようなまねはしたくないんだ」

どうも世の中「筋肉」にたいする偏見が多すぎる。「筋肉」がなければ、動くこともできないのだ。医者にかからずに済む健康法、その一つは筋肉を鍛える事。



■デッドリフトは床に置いてあるバーベルを直立姿勢まで引く。腰と背中への運動です。

それだけでも随分、医療費の節約になるはずだ。体が筋肉だらけな、交通事故にあっへこむのは相手の車。こちらはびんびん元気。

医者をおどかすそんな人、ウェイトトレーニング仲間にいっぱいいます。

パワーリフティングで高級な貴方の体を「維持」してみませんか。

〈よしだ・としこ〉 WSFジャパン会員、日本パワーリフティング協会事務局長、国際1級審判員

Enjoy Sport!



早朝の“体操会”で広がる友達輪 照井英里子

昭和55年、大森海岸に移り住んできた時、よそ者の怖いもの知らずの強みで、早朝のラジオ体操を、町会長に提案しました。夏休みのラジオ体操を始めたところとても好評で、子供から老人まで公園の外まであふれる盛況ぶり。9月に入っても続けたいとの声で、年中無休の「朝友会」（ちょうゆうかい）が誕生しました。

構成員は中高年が主ですが、通りすがりの人など全くこだわりません。毎朝6時7分、まずは呼吸も動作もゆったり、静かに深くと、起き抜けの体の隅々までを伸ばす練功十八法。次に中国体操第六、第八操の刺激のある動きで生身に活力を入れ、最後のラジオ体操で整えます。この間35分。さらに近くの区民公園まで約30分のウォーキング。気ままにおしゃべりしながら、ルンルン気分が1日が始まります。自分の健康のためなので束縛はせず自由参加なのですが、大方は皆に会いたくてハツラツと出てくるのです。

プラン上手な仲間の計画で、季節ごとに山や花を求めてかなり遠方まで日帰りハイキングにも出かけます。翌日には、もう次の計画が楽しみです。会の運営は月初めに「健康の缶」を置き、感謝の気持ちを入れます。一応 300円と決め、残った分は年1回の総会で還元してしまいます。引っ越ししていった仲間が、同じように会を作り、友人も増え人の輪が広がりました。会の仲間は皆、平等の立場であり私も与えられた指導者の役割を大切に楽しく務めていこうと思います。（WSFジャパン会員、「朝友会」指導者）

Hot Line

会員の広場

◆ゴルフが結ぶ地域の縁

青山 晃三 (飛高ゴルフクラブ 会長)



私は、愛知県江南市飛高町という1200戸ほどの町に生まれ、現在にいたっています。ここは昭和40年代に人口が増えた町でスポーツが盛んです。人生80年時代の到来と、1億総スポーツの昨今、健康増進と親睦を目的に、50歳のときゴルフクラブを発足させました。

年3回のコンペにはみんな楽しく参加しています。発足から10年がたち現在、60数名の会員がいます。女性プレーヤーも入会し、最近そのうちの1人がホールインワンを達成しました。これまで7人のホールインワンプレーヤーが誕生しています。この町に生まれ育った私たちと、移り住んできた人々との融和もスポーツのお陰と感謝するこの頃です。（愛知県江南市在住）

♥女性が自然にスポーツを楽しむ方法は？

鈴木 律子 (トライアスロン ジャパン編集部)



「結婚するのでトライアスロンをやめます」という年賀状を毎年、何枚かはいただく。日本のトライアスロン愛好者は10万人ともいわれているが、うち女性は1割に満たない。お金がかかることもあって、そのほとんどが仕事を持つ女性だ。が、結婚や出産を機にトライアスロンをやめる人も少なくない。この競技、いまだに「過酷」という印象が強いが、実は競技そのものより、仕事と家事と練習を両立がさせるほうがずっと難しいのだ。

ある既婚女性の1日は、こんな感じだ。まず早朝、スポーツクラブのスイムセッションに参加し、1時間泳いだ後に、朝食のおにぎりをパクつきながら慌ただしく出勤。会社では少しでも残業を減らすため、必死に仕事をこなし、終業後、再びトレーニングに励む。疲れて帰宅すると、今度は山のような家事が待っている。休日は自転車練習で家をあけるし、好きなことをやってい

る負い目から、夫に「手伝って」とはいえないという。

先日、フリーランスのプランナーとしてバリバリ働く女性トライアスリートに会った。彼女はなんと結婚直前に婚約を破棄したという。

彼女のライフスタイルに相手がついていけず、結局、彼女は結婚でなくトライアスロンをとったのだ。スゴイ！と感心しつつ、なんだかちよっぴり寂しさも感じてしまった。女性が肩ヒジ張らず、自然にスポーツを楽しむのは難しいのだろうか……。



■女性トライアスリートは1割弱

(東京都渋谷区在住)

(©中島健一)

＜短信：1＞

関美那子さん（愛知県名古屋市在住）が愛知県グラウンド・ゴルフ協会10周年記念誌編集委員長として、昨年「あゆみ」をまとめられました。関さんは日本協会の広報委員、県協会常任理事、地元（名古屋市守山区）の理事長としてグラウンド・ゴルフの各種行事の運営などの他、体育指導委員として15年間、地域のスポーツ振興に尽力されています。1人で何役もの仕事を抱え、「無我夢中の月日が流れるだけで、今年は一度ゆっくり考える時間を持ちたい」と、近況のお手紙にありました。

＜短信：2＞

小笠原悦子さん（茨城県水戸市在住）はこのほどスポーツに関わる女性を支援する会・NPO（特定非営利活動）法人ジュース（JWS: Japanese Association for Women in Sport）を設立しました。その記者発表が3月12日、東京・渋谷区の東京ウィメンズプラザで開催されました。米国、英国のWSF などからビデオを含む熱いメッセージが紹介されました。今後の活動が注目されます。詳細をお知りになりたい方は次のところへ。事務局：電話03-5446-8983 URL: www.jws.or.jp（4カ国語対応）